終戦八年後

港南区支部　橋本　綾子（妻）
戦没者　橋本　範雄
戦没地　ソロモン諸島

夫は横須賀海軍航空隊に勤務していましたが、戦争が始まったのは南鳥島へ出張中、十二月末に一度は帰りましたが、三月のはじめラバウルへ転勤になりました。

昭和十七年、子供が生まれてやっと六ケ月の時でした。男子の出生を知らすと、ものすごく大喜びしてくれ「此の子は自分と同じ『軍人にする様に』」との遺書があります。そして毎日毎日あっちこっちと攻撃に行き、機は一式陸攻（皇紀二千六百一年に出来た飛行機）其の搭乗整備員として八名乗りでした。そして、十七年八月七日第一次ソロモン海戦の前日、ガダルカナル方面に出ての帰り途ヤップ島の近くまできた時、もう一方、キズついて帰隊に遅れぎみでヨタヨタとしていた時、敵のグラマン二機にはさみうちされ、先ず敵機、次は夫の機、次は敵機と、三機共に落ち、大きな三つの波紋が広がったと、共に行った友人が無事で帰り、其の様子を本にしてくれ、今は家宝と思い大切にしてあります。そして八月からの俸給はぱったりとまり変だとは思っていました。昭和十八年二月二十二日に戦死の公報が入りました。其の時は、不思議と一滴のな

©2011_財団法人神奈川県遺族会

みだも出ませんでしたが体中に重い重いオモリでも付けられたかの様に座り込んでしまいました。

さあ其の後は人目をさけて、夜な夜などれ程泣き明かした事でしょうか、自分が軍人の妻として充分な覚悟の元に結婚したのに・・・遺骨が帰りましたのは十八年の四月十三日、丁度其の日、たった一人の兄が出征し、女の子二人と妻を残し、やはり帰らぬ人になりました。

母がよく「あっちも、こっちも若後家ばかりで困ったものだ」と云っていました。当時の親は、みんな子供達に先だたれてどんな思いだったのでしょうか。自分の子供でありながら大神に捧げた人と思い暮らさなければならない時でした。

そして、本人が行っていた小学校でとっても立派な村葬をしていただけ、当時のお金で三千円という大金を頂きました。三分の一は夫の母に受け取って頂きました。

空襲がはげしくなり、防空壕に行く時は真っ先に夫の位牌を身につけて、夜昼となしに逃げたものです。仏壇も買えず、昔のみかん箱に位牌を入れてお供え物していました。

終戦の年、六月いっぱいで住んでいました野島町は軍の命令で移転になり、住む所がなくあっちこっちと間借りの生活、「夫亡き、家なき、職なし、金もなけれど死んではいけない」そんな時でした、息子は四才になり「アメリカさんがきて、みんなころされてしまうんだね」と、その言葉には何とも返事が出来ませんでした。明るい所での夕食が出来る、それはうれしいのですが大きな不安の毎日でした。

何とか生きのびながら、終戦と同時にお金の入る道はなく、それからが私の戦争が始まりまし

©2011_財団法人神奈川県遺族会

た。

そして、ようやく昭和二十五年の末に、私が会社へ行く事になり、やれやれ、でも高等教育を受けていない自分には大したお給料はなく、それはそれは困りはてました。

終戦の翌年、金沢文庫へ引越す事になり、ここの近所の人達に、本当によくして頂きお隣の奥さんからは、いつも借金ばかりしての生活で、でも、とってもなぐさめられ、はげまされて大助かりしました。勤めながら、帰ると夜は手内職、仕事の都合で真夜中の二時になった時には、大つぶのなみだが手の甲にぽたりぽたりと落ちて困りました。

ここは大変のどかな所で、ホタル狩り、蛙が鳴き、春先にはノビルがよく出て、息子は真白いうでをまくってはよくノビルを根から取ってきて、そして今日は「オカズがないし、どうしよう」と云った時「オブー（ただのお湯かけご飯の事）でいいよ。」いかに貧乏暮らしになれていたかと受け取れます。

やがて息子も働く様になり、始めて貯金通帳を手にし、うれしかった時の事、郵便局からの帰り道、自分の顔がほころぶのがよくわかるのです。

息子の高校時代には、育英資金を使わせて頂き大変助かりました。

今にして思えば天と地の違い、曾孫は三人すくすくと育ち何の苦労はなく遊びほうけています、こんなに楽していいのかしらとよく思いながら、でも昔は大変だったから其のごほうびを頂いているんだとも思っています。

私亡き後は、ご先祖様を大切にする事を大いに若い者に望みます。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

私は遊びながらも靖国神社参拝とお墓参りにはよく行ってます。
（ずっとあの人の妻であった事、誇りに思っています。）

身は南海に果て散れど　我が心に夫の灯消えず
宮司の読む夫の名達し　せみしぐれ靖国の宮

（夫はお国のためにつくしたのですから、私も何か人様のお役に立てればと、献体登録済みです。）

©2011_財団法人神奈川県遺族会